

414

4

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100

始



34-11



法隆寺大鏡



第九集

大正
13.3.31
製本



法隆寺大鏡第九集挿圖解説

第一、第五、金堂木彫着色聖観音像

正面 同 背面 同 光背 等身大

佛像は経軌の教ふる所に従ひ、形貌に變化自在の妙を呈せざる如きも、事實は決して然らず、物の異り作の一ならざるに共に、形態また變轉不窮の妙あり、本像の如き藤原初期の製作に係りながら、其面貌の表情、全く比類を見ず、双頬未だ圓満の極に達せざれど、初初しき無垢の容は目毗口元の邊に仄き、裳の縁また其意を承けて、數も少なに淺く刻まれたり、髪は純唐様式を存し、純藤原式の寶鬘低く束ねたる髪束の頭上に垂るゝに至らず、從うて髪筋を一々刻鏤すること尙前代の遺風を繼承するに似たり、此等の様式は後に鎌倉時代に於て復古せらるれど、所謂藤原の盛時には其勢を潜めたるの觀あり、全身施彩、處々大花丸紋を散らす、繪に見る鍍金の直線若くは曲線模様のみにて全面を填充し、其間に同じ丸紋を散らせるとは、自ら趣を一にせざる所あり、寶鬘は後補と認められざるにあらねど、速肉を中心としての三遍蓮花、反花及び二段の椀座は本像と同時に係り、背を掩へる二重の舉身光はまた同作とみて可ならむ、すべて彩色を用ひて金箔をとらず、これまた藤原初期の常套手段たり、



第六、第八、五重塔塼文殊菩薩像

正面 同 背面 同 高一尺三寸五分

第九、第十一、同塼維摩居士像

正面 同 背面 同 高一尺〇一分

以上兩像は天平十九年寶曆帳に和銅辛亥年四年の制作と云へる者、帳には維摩詰士一具と稱す、維摩經は本邦佛教渡來の初より尊崇され、聖德太子も既に其注疏に筆とり給へることあり、其變相を塼土に現するは、自らなる時代の要求なるべし、同塼の文殊と對同の維摩詰居士とを比すれば、一は端嚴微妙の菩薩身、一は鬚髯長うして形にそれと知らるゝ白髮の老翁、言と不言と不二の法門ならざれど、伎巧の妙は二にして不二、一にして不二、形こそ異なれど對照して造れる作家の苦心は、何れにも明らかに檢すべし、文殊菩薩の形相純唐式なるは、前に夢達觀音像に云へると同じく、維摩居士の形相、法華寺の像とも異りて、玉眼ならざる像の如意を執れるに同じからず、脇息を前に控へての相貌は唯これ竹林七賢の一人を見るに若しく、文殊像より寧ろ製作に苦心の痕を認むべからずや、鬚髯を立體にするは古來藝術家の慣るる所、之を印象的に現すの先驅は、則ち此像に於て徴するの外無かるべし、維摩の像、彫刻に現はれては法華寺の塼像石山寺の木像等あり、繪畫にしては黒田侯爵家藏東福寺の弁慶等あれど、最古の立體彫刻としては此像を推すの外なく、書像としては概ね斜面像にして、正面の像をとらず、唯脇息のみは此像と書像と相叶へるあり、佛教彫刻として老少對照の妙は不動二童子に於て現はれ、男女兩性の對立は毘沙門天吉祥天善財童子にも現はれたれど、彫刻中の優秀なる否最古の彫刻として年輩の懸絶せる兩像をかくも均齊せしめたるもの恐く他にあらざるべし、

第十二、第十三、御物 伎樂面 正面背面

高一尺〇二分幅七寸三分
奥行六寸三分

伎樂面の舞樂面と同じく、奈良朝時代に行はれしは普く人の知る所なり、此面また當時所用の一なるべし、修補の時日明らかならざれど、他の諸面と同じく藤原末期の補修に係れるならむ、假面は佛像彫刻と異りて、寧ろ廣義の表情を有すれど、其間また高東せられざる伎巧の自由を存す、此面の如き面として餘に寫實的ならざる用意の見ゆるは、象徴的の意味を寓すると共に、また古代的の神秘主義の酒めるを徴すべし、

第十四、第十五、御物 浴佛盤 高五寸二分五分
一尺五分

銅造灌佛會の料盤にして、現存東大寺の藏品よりは、寧ろ著しく銀鉢形を帯ふるを見る、一面寶相華つる草の毛彫にて空間を填充するに小凹點を以てす、模様といひ手段と云ひ、殆ど東大寺のと異なるなれ、これに由つて時代を推さば奈良朝の製品たる疑ふべくもなし、惜むらくは本尊灌佛像を逸し去ることを、

第十六、第十七、御物 如意 第十七圖原寸

傳へていふ行信僧都の如意と、如意に三名器あり、東大寺聖寶僧正及び興福寺清範僧正の如意と、法隆寺行信僧都の是也と、姑らく行信所持の如意として之を掲ぐ、傳來の如何は前集既に詳かにせるを以て、今再び之を贅せず、

第十八、御物 錦 原寸

本集登載の錦は前諸集に出せる各種の古製と同じく奈良朝時代の古製にかゝるものなり、今其織實を窺はんが爲めに之を玻璃版に製し其色采を見さんが爲めに之が一部を木版に附す、

第十九、御物 佛器 原寸

銅製にして、前集掲載の佛器と類を同くす、

第二十、御物 文陀竭王經 八寸五分

黃紙墨書、所謂光明皇后御願經なり、御願經は諸處に離散し、今その全豹を窺ひ難けれど、此經の存するはこれを完成する所以の唯一資料たるを失はず、紙に横縷あり、また寸弱を距てて堅麗あり、これ當時製紙の證徴とするに足るべし、



一〇 像立菩薩普世觀聖色着彫木



二〇 像立薩菩普世觀聖色若耶本



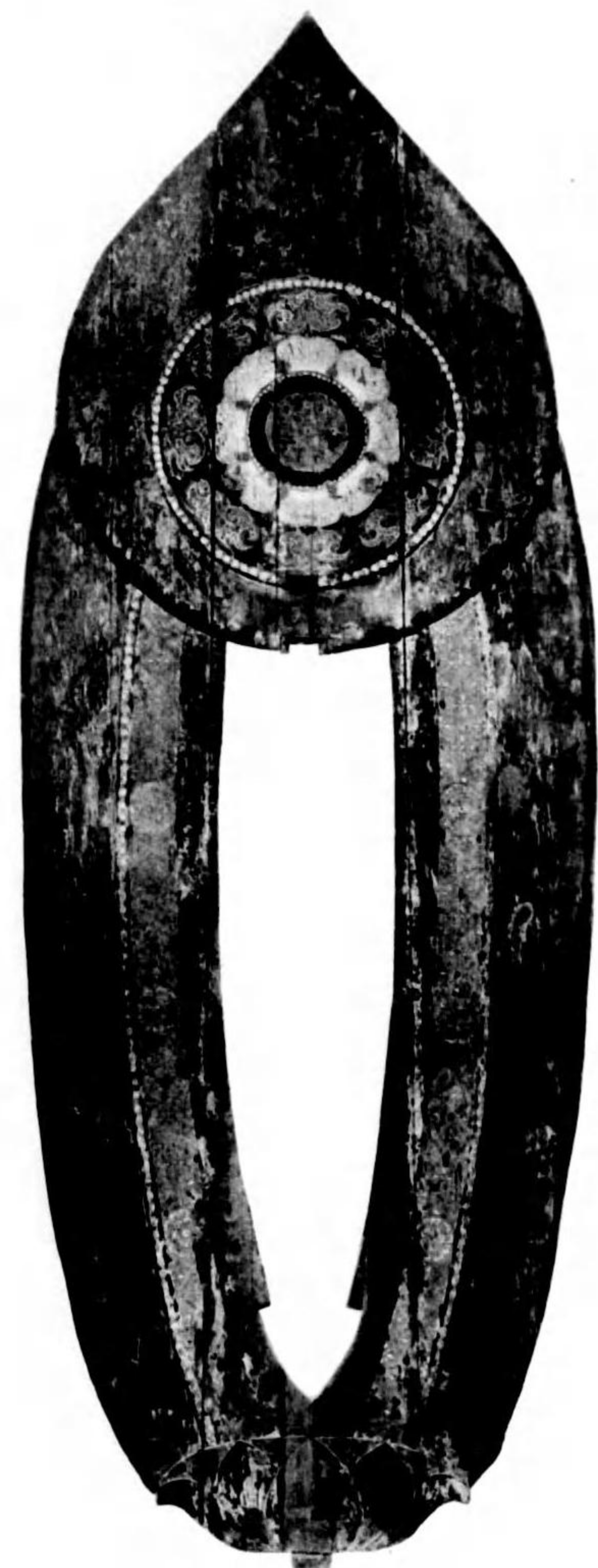
石印本

三三 像立薩菩普世觀聖色石印本



佛立菩薩普世觀聖色若彫木

四四 佛立菩薩普世觀聖色若彫木



阿彌陀佛

青光嚴菩薩世觀華色着彫木

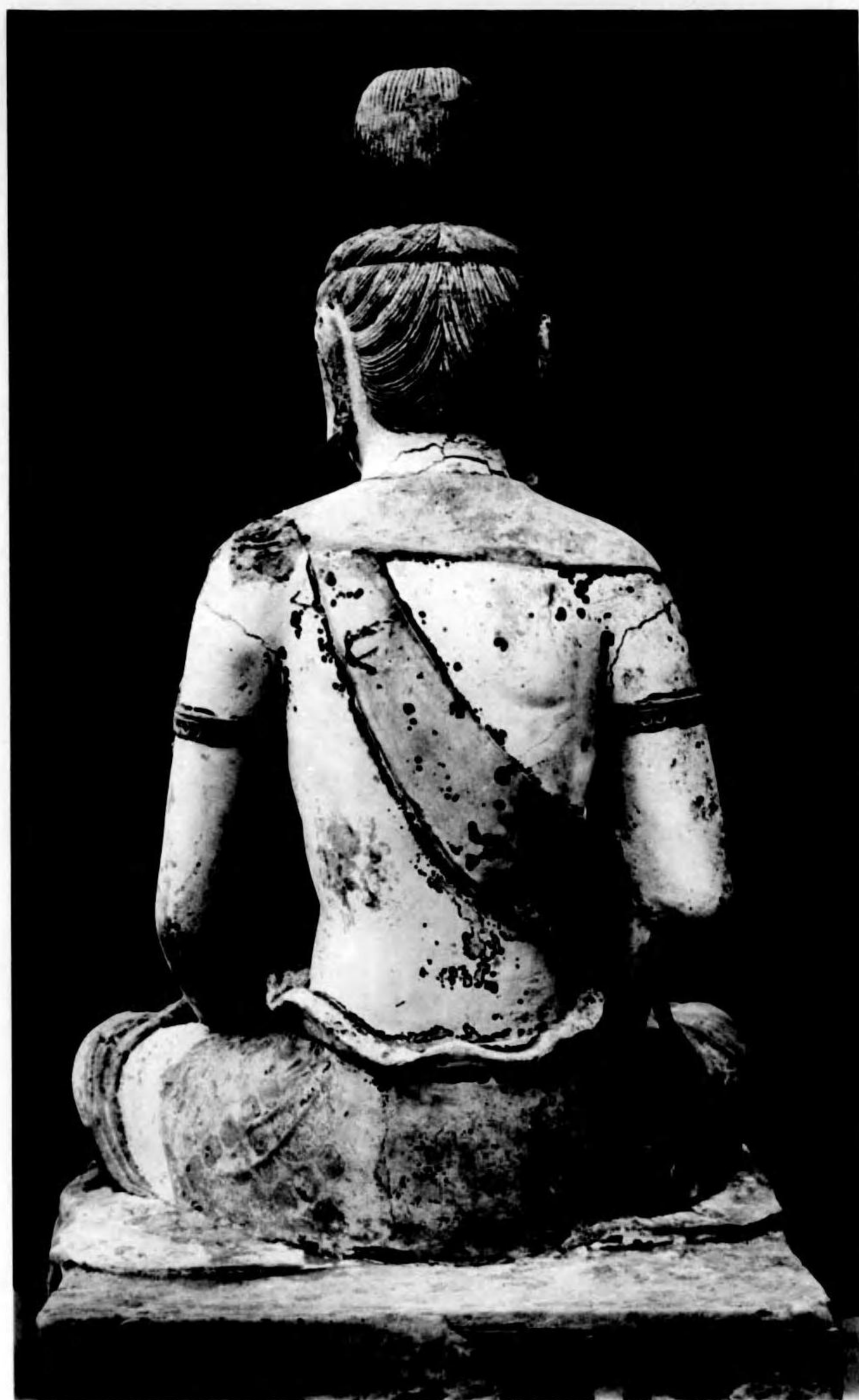


一〇〇 像坐菩薩珠文璽塔重五



五重塔文殊菩薩坐像

二〇〇 五重塔文殊菩薩坐像



五重塔文殊菩薩坐像

三〇〇 像坐菩薩文殊塔重五



一〇 像坐土居摩羅塔重五



二五 像坐十层摩竭塔重五



三〇 像坐土窟摩羅塔重五



一〇三 面樂伎色着彫木 物御



京都府立総合資料館蔵

二〇 面樂伎色着彫木 物御



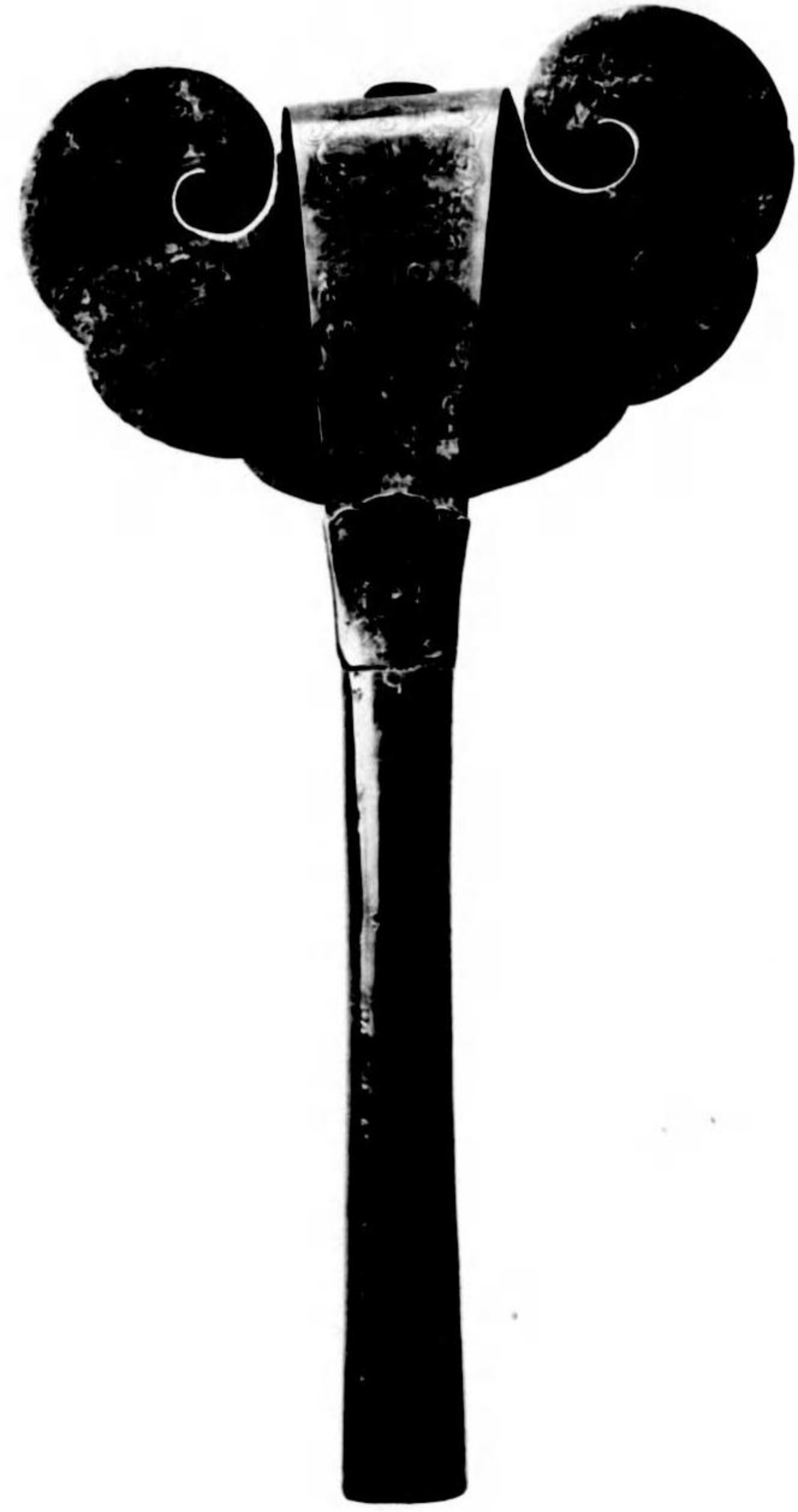
一、X 岩標標本 物即

中国科学院

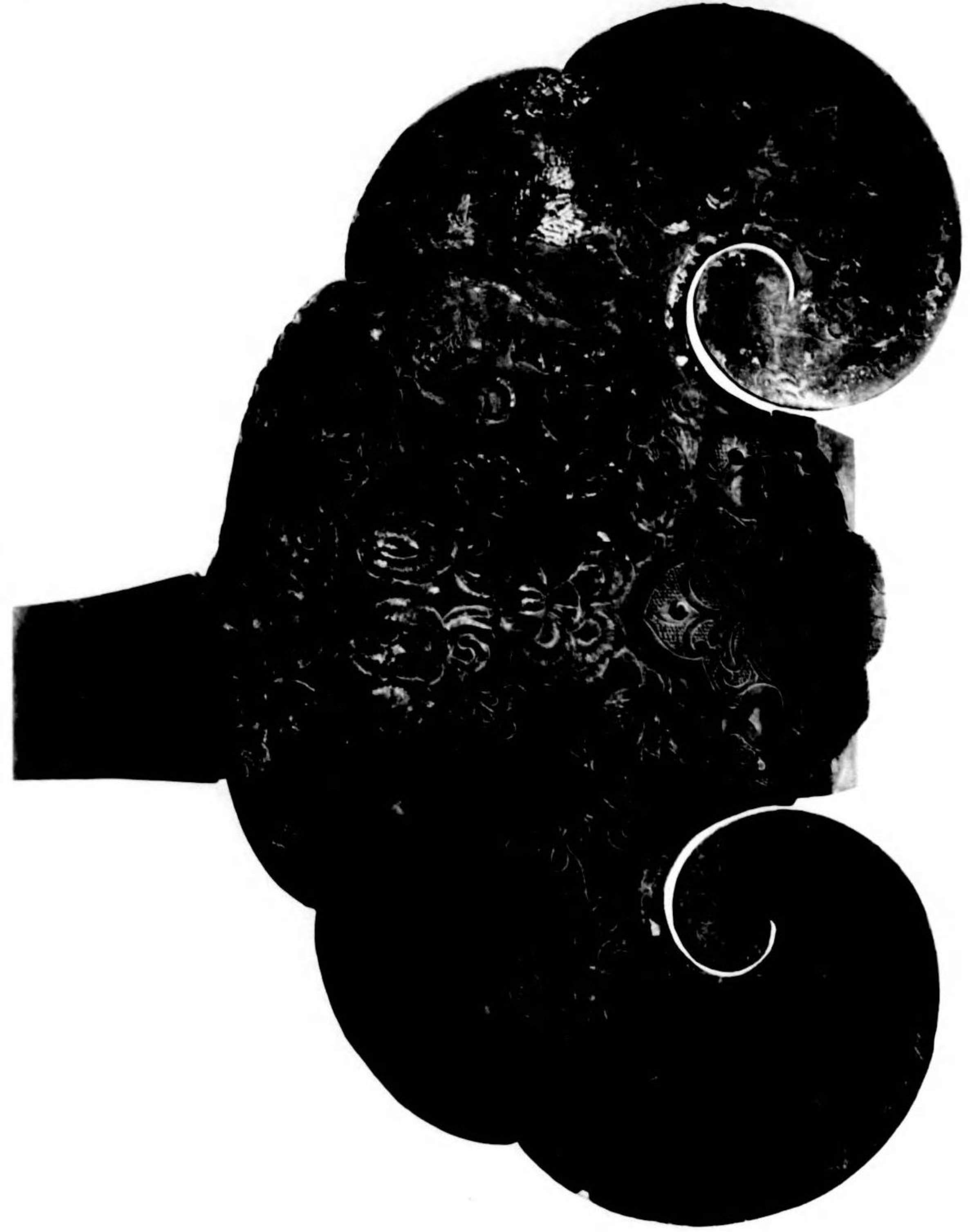
二五 聖德太子御製 物部



聖德太子御製



（三）意如物如

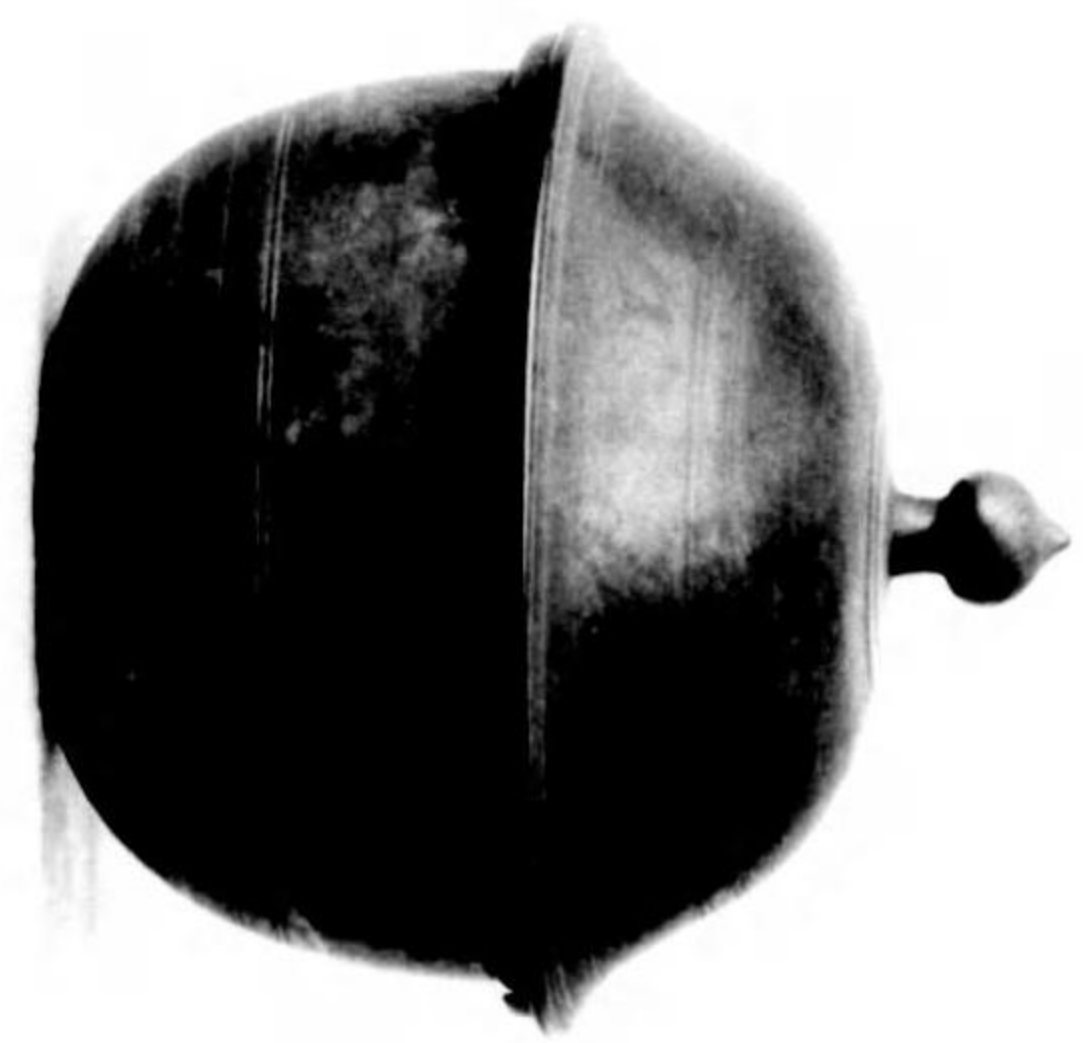
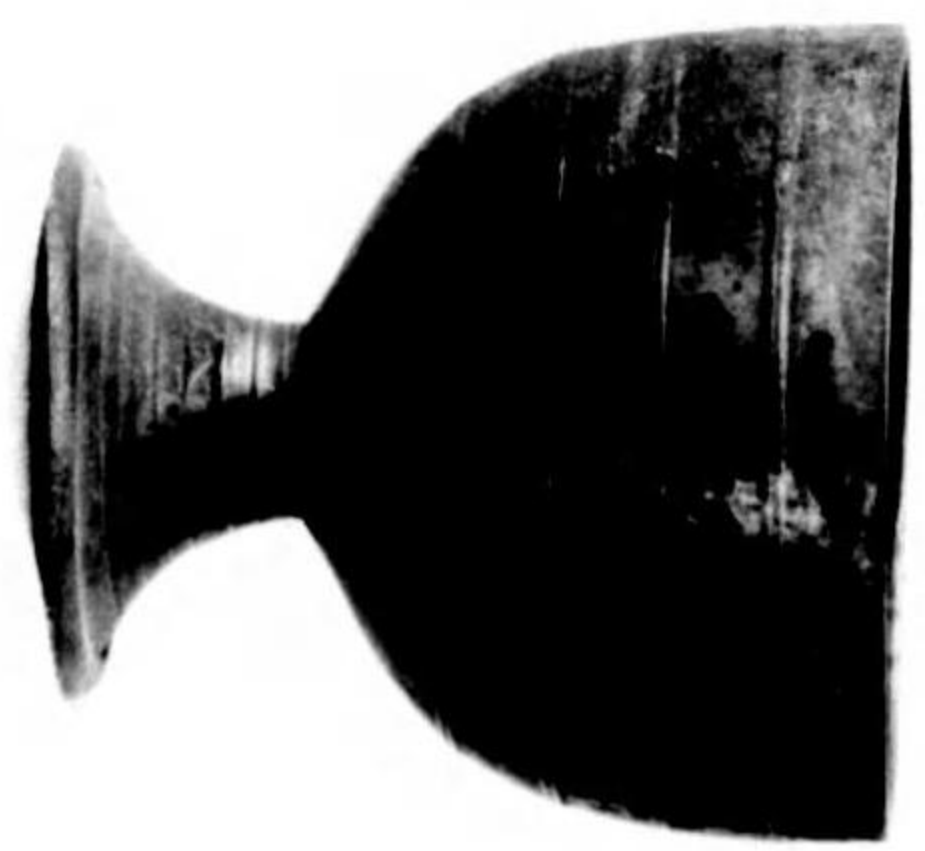


第 九 卷



第 九 卷

第 九 卷



器
物
部

國立中央研究院
歷史語言研究所

食之適復前行遠見諸寶樹百種赤樹金銀
璧環瓔珞皆懸者樹玉間邊臣言欲曾見是
諸寶樹不邊臣言唯然見之玉言是故百種
赤樹金銀璧環瓔珞樹也汝曾往皆當共取
我身也佛說如是阿難歡喜為佛作禮

文他竭王經

維天年壬午歲次庚辰三月十五日百三區麻原夫
奉為 云等贈及臣商慶見在 自觀

那王教頌教等一切經，各一部莊嚴已訖

該齋敬潔藉此勝緣伏惟 尊府名道濟

運連神通行國見在 那王神朗喜福

作異檀伏願

聖朝萬壽國王清年百辟喜恩披之快樂及

檀王勝存夫人常遇善緣必成勝果俱出

虛勞同登彼岸



大正三年七月十七日印刷
大正三年七月二十日發行

(第九集二十枚)

大和國法隆寺藏版
東京美術學校編輯

發行者 東京市下谷區上根岸町百廿二番地
白石村治

印刷者 東京市下谷區中根岸町六十八番地
武田勝之助

發行所 東京市下谷區中根岸町六十八番地
墨彩堂

終

